

2024年度（令和6年度）学校評価自己評価表

城西中学校区	校番9	福山市立 泉小学校
最終更新日		2025 年（令和 7 年）2 月 1 日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
○学習に対する取組みでは、各校とも児童生徒が意欲的に授業に取り組んでいる様子が見られ、一定の成果が出ている。 ○これまでできなかった様々な活動や行事ができるようになり、子ども達が生き生きとしており、楽しく学校生活を送っていると感じられる。 ●読書活動や書く活動など、小・中学校が連携して取り組むことで、児童生徒の読む力、表現力の向上を図っていくことが大切である。	○「子ども主体の学び」を目指し、小・中学校が連携して研究・実践を行い、授業改善を進めており、児童生徒の授業に対する意欲、積極性は高い。 ○行事等を通して、小・中学校とも集団づくり、児童生徒の主体的な活動に取り組んでおり、意欲的に頑張る児童生徒は増えている。 ●読書活動や書く活動の充実に取り組む、児童生徒の表現力を高める必要がある。 ●小・中学校が緊密に連携し、引き続き不登校生徒減少への丁寧な取り組みが必要である。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	地域に愛着と誇りを持ち、心豊かにたくましく生きる子ども
		中学校区として統一した取組等	○自己肯定感を高める。(小中合同ボランティア活動・中学校オープンスクール) ○コミュニケーション力・表現力・忍耐力をつける。(校区公開授業研究) ○健康への意識を高め、体力向上を図る。 (体力向上の取組・体力テストの分析・生活改善の取組・校区保健だよりの発行)

III 自 校

ミッション	児童が自ら学び、相互にかかわり高め合う教育活動を行うことで、次世代を担う人材を育成する。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
学校教育目標	自ら学び、仲間とともにたくましく生きぬく子どもを育てる	めざす子ども像	全学年 ○自分や他者を理解し、自ら考え判断し、表現する子ども ＜表現力＞ 様々な場面で言葉や技能を用いる。 信頼できる知識や情報を収集し活用する。 ＜コミュニケーション力＞ 目標を達成するために、他者と協働する。 意見の対立や理解の相違を互いの違いを認め合いながら解決する。 ＜忍耐力＞ 感情をコントロールし、ルールを踏まえて建設的な意見を述べる。 見通しをもって計画的に行動し、軌道修正しながら最後までやり遂げる。
現 状	＜児童生徒＞ 自己表現の仕方やコミュニケーションの取り方に課題がみられる。問題解決にむけて、児童一人一人の思いに寄り添いながら取り組んできているが、朝、定刻に登校することが難しい児童もいる。また、学力面においては、各種調査において、結果を上回る学年があるものの全体的に読解力や活用問題に課題がみられる。新体力テストは、走力や柔軟性などに課題がみられた。体育の授業でこれらの課題が改善できる運動を取り入れて実施している。 ＜授業＞ ・個別最適な学びを取り入れ、児童の振り返りから授業改善に取り組んだ。引き続き、アセスアンケートや児童の振り返りから、「児童一人一人の学びやすさ」を分析し、学びの環境づくりに取り組んでいく。 ・職員が実践交流や教材研究を計画的に行い、児童が成長を実感できる振り返りを実践した。さらに、学校全体で振り返りの視点を明確化して、児童がより成長を実感し、次の学びにつながるよう取り組む。	研究	テーマ 学ぶことへの面白さを感じ、学びに向かう力を伸ばしていく授業づくり 内容等 ・「学びが面白い」と実感する個別最適な学びの実践 ・子ども・教材への理解を深める教材研究
		めざす授業の姿	・個別最適な学びを通して、子どもたちが面白さを感じられるような授業 ・個別や仲間との学び合いを組み合わせ、課題解決していく授業 ・個の学びを見取り、児童が「できた」「わかった」「次はこうしてみたい」という思いや自信がもてる授業

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立

泉小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目 標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 評 価	達 成 評 価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 評 価	達 成 評 価	総 合 評 価	改善方策
3	課題を見出し、解決 に向けて挑戦する意 欲と諦めずに学び続 ける力を付ける。	★	継 続	児童一人一 人の知って いることを 生かした学 びを展開し、 児童が自ら の伸びや成 長を実感す ることがで きる。	・個別最適な学び を取り入れ、児 童の学習の振 り返りから授 業改善に取り 組む。	・児童アンケート 【学びが面白い】 肯定的回答 85%以上	・児童アンケート「学 びが面白い」(7月) 90% …個別最適な学びを 取り入れ、児童の 「学びにくさ」と 「足場かけ」を想定 した授業を実践す るとともに、児童の 振り返りから授業 改善に取り組んだ。	3	3	・アセスアンケート や児童の振り返り から、「児童一人一 人の学びやすさ」 や「障壁の要因」 を分析し、学びの 環境づくりに取り 組む。また、授業 改善シート等で授 業づくりについて 職員間で定期的に 協議する。	・児童アンケート「学 びが面白い」(1月) 89% …児童の「学びにく さ」と「足場かけ」 を想定した授業を 実践した。また児 童の振り返りや 「足場かけ」に対 する児童の変化か ら授業改善に取り 組んだ。	3	3	3	・「足場かけ」に対する 児童の変化やアセスア ンケート、児童の振 り返り等を、職員同士で 協議・共有する。そし てより一層、学びのユニ バーサルデザインの 考え方を取り入れ た授業を実践し、学び の環境づくりに取り 組む。
					・教材研究を深め るために、研究 体制の刷新を 図った授業づ くりを行う。学 校全体で振 り返りの視点を 明確化し児童 が学びの成長 を実感できる よう取り組む。	・児童アンケート 【成長実感に関す る項目】 肯定的回答 85%以上	・児童アンケート「成 長を実感してい る」(7月)89% …職員で実践交流や 教材研究を計画的 に行い、児童が成 長を実感できる振 り返りを実践し た。	3	3	・授業や学びタイム、 家庭学習で「言葉 の習得」を意識し た取組を取り入 れ、児童の語彙力 を増やすことで、 成長実感につなげ る。 ・学びのUDの考え 方を取り入れた授 業の実践や実践交 流をすることで、 児童に合った学び を展開する。	・児童アンケート「成 長を実感してい る」(1月)92. 7% …授業や学びタイ ム、家庭学習で「言 葉の習得」を意識 した取組を取り入 れ、児童の語彙力 を増やすことで、 成長実感につなげ られた。	3	4	3	・児童がより成長を実感 し、次の学びにつなが るように、振り返りの 視点を明確化し、学校 全体で意識統一して取 り組む。 ・授業や学びタイム、家 庭学習で、より一層「言 葉の習得」を意識した 取組を行う。また各学 級の進捗状況を職員同 士で共有を行い、学校 全体の学びタイムの質 の向上を目指す。
3	誰もが自分らしく学 ぶことができる学校 づくりに貢献でき る。	★	継 続	学校生活を よりよくす るために、 自分たちが できること を考え行動 することが できる。	・日々の生活や行 事等様々な場 面で、相手意識 をもたせてコ ミュニケーシ ョンの機会を 設定する。	・児童会や委員会、 各学級から全校 へ取組の発信 や、学校生活を よりよくしよ うと主体的に行動 している児童の 紹介(評価)を 月に5回以上行 う。	・児童会や委員会、 各学級から全校へ 取組の発信や児童 の紹介を月に10 回以上行うことが できた。また、教 職員から学校全体 の成果や課題につ いて週に1回放送 し、共通理解を図 ることができた。	3	4	・学校や学年、学級、 さらには個々の成 果や頑張りを放送 し、共通理解・自 己肯定感の向上を 目指す。 ・教職員からの学校 全体の成果や課題 の放送を継続して 行う。	・児童会や委員会、各 学級から全校へ取 組の発信や評価、児 童の紹介を月に1 0回以上行うこと ができた。また、教 職員から学校での 児童の成果や課題 について週1回程 度放送して伝える ことができた。	3	4	3	・学級委員と児童会がお 互いに意見を伝えるこ とができる仕組みを作 り、児童の意見を学校 の方針に生かすことが できるようにする。 ・各教職員(委員会の担 当等)からの学校全体 の成果や課題につい て、様々な視点から児 童に伝える機会(放送、 学活等)を設ける。

				・アセスアンケートを実施し、児童の学校適応度を見取る。	・生活満足感の数値が40以下の児童5%以下	・生活満足感の数値が40以下の児童4.9% 目標数値を達成することができた。	3	4	・アセスアンケートの結果を踏まえ、アセスメント会議を実施し児童への支援方策を担当だけが考えるだけでなく教職員で共有する。	・生活満足感の数値が40以下の児童7.2% 目標数値を達成することができなかった。	3	2	3	・アセスメント会議を行い、1回目と2回目のアセスアンケートの結果を比較したり、各指標の気になる児童をピックアップしたりすることで、今後の支援策を考え、教職員で共有する。
r i	自ら進んで健康保持、体力向上に努める。	継続	健康診断、体力テストの結果等から、自らの健康について課題意識をもち、改善に向けて取り組む。	・健康診断、体力テスト等の結果から、自身の課題を明確にし、改善するための取組内容・方法を決めて改善に努める。	・自身の健康面・体力面の課題を明らかにし、改善計画を作成し、実行している児童85%以上	・児童アンケート「自分は、健康診断、体力テストの結果から、目標をもって、取り組んでいる。」(7月)86% …「チャレンジメディア」や「ステップアップカード」の取組を通して、自身の課題を見付け、改善に向け取り組むことができた。	3	3	・「生活リズムアンケート」の結果等から、メディアの使い方や、就寝時間についての課題を、教職員同士で確認し、共通意識をもった上で、継続的に児童・保護者に呼び掛けていく。 ・「めざせ！体力アップ」を活用し、児童自身が自分の苦手な動きに対しての目標を決め、取り組んでいく。	・児童アンケート「自分は、健康診断、体力テストの結果から、目標をもって、取り組んでいる。」(1月)83% …「チャレンジメディア」や「めざせ！体力アップ」の取組を通して、目標をもって取り組む児童の姿が見られた。取組や声掛けが継続的に行う。	3	2	3	・各取組で明らかになった健康や体力についての課題を、教職員同士で再度確認し、共通意識をもった上で、引き続き児童・保護者に呼び掛けていく。 ・取り組み後、定期的に自分の課題や目標を振り返るなどし、継続的に児童が自分の生活を見つめなおすことができるようにする。
				・定期的に全校遊びや体力づくり週間を企画し、継続した体力づくりに取り組む。	・運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツが「好き・やや好き」と回答する児童85%以上	・児童アンケート「自分は、スポーツや体を動かすことが好きである。」(7月)85% …全校遊びや体力づくり週間等の取組は実施できていないが、運動会等の体育的行事や、休憩時間の外遊びを通して、体を動かす児童が増えた。	3	3	・体育委員を中心に、校内遊び等を計画し、児童が体を動かす楽しさを感じられるようにする。 ・体育科の授業において、校内研修等を実施し、児童が主体的に取り組める授業づくりに向けた授業改善を図る。	・児童アンケート「自分は、スポーツや体を動かすことが好きである。」(1月)84% …全校遊びやなわとびタイム、ランタイム等を通して、継続した体力づくりに取り組むことができたが、自分から進んで運動に取り組む児童を増やすことはできなかった。	3	2	3	・引き続き、児童会や体育委員会を中心に校内遊び等を行ったり、体育的行事を行ったりして、児童が体を動かす楽しさを感じられるようにする。 ・体育科の授業や体育的行事の中で、児童が「できた」、「やってよかった」と感じられるように、体育の授業の見直しや研修、職員同士の情報交換等を積極的に行っていく。

1	教職員が児童に元気を与え、職務にやりがいを感じることでできる職場環境を醸成する。	新規	自らの個性や能力を発揮する場を設定する。	教職員が、日々の取組、自分の得意分野等について、文書や動画に年間2回まとめ、教職員間で交流する。	教職員アンケート「仕事にやりがいを感じている」90%以上	教職員アンケート（8月）92%…夏季休業中に、2つの視点（①主体性を育む学びづくり、②学びにくさを意識した授業づくり）から、各教職員が1学期の実践を書面や動画にまとめ、全体で交流をする中で、自分の業務を振り返り、今後の取組への見通しをもつことができた教職員が増えた。	3	3	- 教職員が、「自ら伸びる」という姿勢で業務を進められるよう、今後、さらに一度、実践まとめと交流の場をもつ。 - 各部会や各担当者間でコミュニケーションを深めることで、管理職や職員間で、相互の業務についてフィードバックしやすい雰囲気をつくる。	教職員アンケート（1月）93%…数値としては、中間段階とほぼ変わりなく、自己の仕事について充実している職員が多いと言える。また、「担当業務の充実」「職場に安心感がある」については、大幅に改善した。	3	3	3	「自分の実践や強みをまとめ、同僚と本音で共有する」ことを目的とした実践交流会の内容をさらに充実させ、教職員のやりがいの向上につなげる。 - 子どもが伸び伸びとした学校生活を送るためには、教職員の「安心して働くことができる」雰囲気が必要不可欠であると考え。そのため、「やりがい」と「安心感」の両軸から、教職員発のアイデアを職場づくりに生かす取組を企画、実施する。
			ワークライフバランスのとれた業務と生活	会議や校内研修の内容精選、職員室環境の整備等に取り組み、各教職員が授業づくりに集中できる環境をつくる。	時間外在校時間「年間360時間以内」90%	時間外在校時間360時間（上半期180時間）以内50%…日々の18時の退勤への相互声かけ、週1回の定時退勤日の徹底などを通し、業務時間の改善は進んでいる。	3	2	月間時間外在校時間45時間以内はほぼ100%であるが、年間換算としての月平均32時間（年360時間）以内は、難しい現状がある。そのため、業務の平準化をさらに進めることで、業務の偏りを改善する。	時間外在校時間360時間（下半期180時間）以内52%…月間在校時間45時間以内は100%である。また、時間外在校時間33～40時間の職員35%以上を占めている。	3	2	3	- 職場内の相互の声かけをとおして、月間の目標が「45時間ではなく、30時間程度」であることを、職場に浸透させる。 - 管理職は、各担当者の業務の進捗状況を的確に把握し、必要であれば、担当業務内容の変更、及び内容の割振りの変更などを実施する。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度